

## 主の洗礼 B年

2015. 1. 11 9 : 30 ミサ

第一朗読 イザヤ 55・1-11

第二朗読 使徒ヨハネの手紙 I 5・1-9

福音朗読 マルコ 1・7-11

クラレチアン宣教会 長崎 壮助祭  
クラレチアン宣教会

今日私たちは主の洗礼を祝いますが、典礼暦上は今日でクリスマスから始まった降誕節が終わり明日から年間第一週日が始まります。降誕節はイエスが人となられた神の子であることがはっきりと示されたことを祝う季節であり、主の洗礼の祝日はイエスが御父から委ねられた使命を公に開始した出来事として祝われます。

イエスが洗礼を受けたことは、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネと全ての福音書記者が記していることであり、それだけ重要な意味をもっている証拠でもあるのですが、私は神学校に入るまで、「イエス様は神様なのにどうして普通の人間のように洗礼を受ける必要があったのだろうか？」と疑問に思っていました。そこで今日は、この意味について考えてみたいと思います。

福音を読んでみますとヨハネはイエスについて「わたしよりも優れた方が、後から来られる。わたしはかがんでその方の履物のひもを解く値打ちもない」(マルコ 1・7)と言いました。ヨハネの言葉は、卑屈さから出た言葉ではありません。むしろ自分の使命をはっきりと自覚している者の口から出た言葉でしょう。そして「わたしは水であなたたちに洗礼を授けたが、その方は聖霊で洗礼をお授けになる」(マルコ 1・8)と、自分の授ける洗礼とイエスが授ける洗礼が根本的に違うことを教えます。その理由は、ヨハネの授けた洗礼は「悔い改め」のしるしであり儀式としての洗礼であったのに対して、イエスの授ける洗礼には神が介入するということです。

それでもイエスがヨハネから洗礼を受けたのは、弱く欠点だらけのわたしたちの立場に降り、わたしたち人間の歩むべき目標を示すため。また、神の御心に適う者とされるためには人間とは何であるのか、そして神が何であるのかを

知ることが全ての人に必要であることを手本を以って示すためであったと考えられます。

イエスが洗礼を受けた場面で、父である神が自分の霊を注ぎ、イエスが自分の愛する子であることを宣言されます。

イエスに注がれた御父の霊はイエスの中にあってイエスを神の国の宣教と十字架上の自己奉獻へと強く駆り立てました。イエスは御父の子としてこの霊の強い導きに従わずにいられなかったのです。イエスの洗礼以後、イエスの名によって洗礼が授けられるとき、そこに神が働かれるようになったのです。

わたしたちも、イエスが命じた洗礼を受けることにより、聖霊を受け、聖霊を宿す者となり、神に愛され、神の心に適う者としていただいたのです。

今日ミサの中で新成人のお祝いが行われますが、成人したキリスト者として生きるということは、単に「罪を犯さずに道徳的・倫理的に正しく生きる」というような小さな枠で生きることではありません。イエスと同じく、神様の子として「愛されているんだ」と感じているならば、自分よりも弱い人々を助け、寄り添って生きることができるはずです。

主の洗礼の説教を準備するに当たり、わたし自身が洗礼を受けたときのことを思い出していました。二十数年前、大学生の時のことですが、真言宗の寺で生まれた母、僧侶をしている叔父をもつ家庭で生まれた自分は、仏教の風習の中で生活し、毎日朝晩仏壇に手を合わせる習慣がありました。今考えてみると、先祖の魂の平安と家族の無病息災を実体がピンとこない仏様に向かって漠然とした気持ちで祈っていたのだと思います。

そんなわたしも洗礼を受けたことにより、それまでは何を信じて生きればいいのかわからなかったのが、これからはキリストを信じ、聖書のみことばを拠りどころとして生きようと決意することが出来ました。

また、今までは誰に向かって祈ればいいのか漠然としてわからなかったのが、洗礼を受けたことにより、イエスとともに父なる神に祈れるようになったのではないかと思います。

わたしたちは毎日曜日ミサに与ると御聖体をいただきます。何度でもいただくことのできる御聖体の秘跡と違い、洗礼というのは、生涯にただ一度だけ受けることができる秘跡です。恵みはその時にいただくわけですが、その恵みは

信仰の歩みの中で徐々に生きていくものなのではないかと思います。

主の洗礼を祝うこの日は、わたしたちが受けた洗礼の恵みについて思い巡らす良い機会ともなります。わたしたち一人ひとりが神から愛されているという自覚を新たに、このミサを感謝のうちに捧げてまいりましょう。